プログラム・ノート

柴田克彦

今回の「響きの森クラシック・シリーズ」は、文京シビックホール開館15周年を記念した「小林研一郎指揮“オール・チャイコフスキー・プログラム”」（全4回）の最終回。同時期に作曲されたヴァイオリン協奏曲と交響曲第4番が披露されます。協奏曲のソロは、2007年チャイコフスキー国際コンクールの覇者、神尾真由子。深みと繊細さを増している今の彼女が、コンクールゆかりの十八番をどう奏でるか?に注目が集まります。交響曲第4番は、三大交響曲の中では最も民族的でエネルギッシュな作品。コバケンの熱いタクトによる豪快な音楽が、シリーズを華麗に締めくくります。

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840－1893）

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op. 35

ロシア最大の巨匠チャイコフスキーが残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの各曲と並ぶ、同ジャンルの代表作です。

チャイコフスキーは、1878年春、前年の無理な結婚と破綻による神経衰弱状態（交響曲第4番の項を参照）を脱するため、スイスのレマン湖畔のクララランで療養していました。そこへ若手ヴァイオリニスト、コテークが訪れ、様々な新作ヴァイオリン曲を紹介しました。中でもラロの『スペイン交響曲』（内容は華麗なヴァイオリン協奏曲）に惹かれた彼は、ヴァイオリン協奏曲の構想が湧き上がり、コテークのアドバイスを受けながら、僅か1ヶ月足らずでこの協奏曲を完成します。そして、ロシアの第一人者レオポルド・アウアーに初演を依頼したのですが、「演奏不能」との理由で拒否されてしまいます。その事態を救ったのが、ドイツ系の奏者アドルフ・ブロズキー。彼の尽力によって、作曲から3年後の1881年12月、ようやくウィーンでの初演にこぎつけました。しかし当地の大御所批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と言われる始末。それでも曲の価値を信じるブロズキーが積極的に紹介し続けた結果、大きな人気を獲得し、遂にはアウアーも進んで演奏するようになりました。

3年前に書かれたピアノ協奏曲第1番もやはり、ロシアの第一人者ニコライ・ルビンシテインに否定され、ドイツの大家ハンス・フォン・ビューローによってアメリカで初演されています。チャイコフスキーの人気協奏曲が似た運命を歩んだことは、その音楽の国際性を示していると言えなくもありません。

曲は、情熱と哀愁に充ちた聴き応え満点の名作。協奏曲としてはやはり民族的な情緒がまさった作品であり、チャイコフスキーならではの旋律美が大きな魅力を成しています。「演奏不能」と言われた位ですから、ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多く、ライヴで完璧に弾き切るのは、かなり大変な作品でもあります。

第1楽章：アレグロ・モデラート — モデラート・アッサイ。2つの主題を軸にした長い楽章です。序奏に続いて独奏ヴァイオリンがカデンツァ風に登場。華やかさと哀感が交叉しながら盛り上がり、技巧的なソロが縦横に繰り広げられます。

第2楽章：カンツォネッタ（＝小さな歌）、アンダンテ。弱音器を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、中間部ではやや明るめの曲調に変わります。切れ目なく第3楽章に移行。

第3楽章：フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ。民族舞曲風の躍動的な終曲。激しく始まり、熱狂的な展開を遂げた後、畳み込むように終結します。

交響曲第4番 ヘ短調 op. 36

第5番、第6番『悲愴』へと続く「三大交響曲」の第1弾。第5番とは10年ほど離れた、激動期ともいえる時期の作品です。チャイコフスキーは、1877年4月にモスクワ音楽院の教え子（彼自身は憶えていなかったといいます）のアントニーナ・ミリューコヴァから求愛され、7月に結婚します。しかしすぐに破綻。9月にはモスクワ川に入水して凍死を企て、未遂に終わります。そして10月にロシアを脱出し、翌1878年4月まで、スイスやフランス、イタリアで静養します。また同時期には、鉄道王の未亡人フォン・メック夫人からの年金が約束され、フリーランスへの道が開けました。

本作は、この真っただ中の1877年春頃に作曲が開始され、1878年1月に静養先であるイタリアのサンレモで完成されました。つまりスイスでヴァイオリン協奏曲を書く直前の作ということになります。初演は同年2月にモスクワで行われ、イタリア滞在中のチャイコフスキーのもとには、成功の知らせが電報で伝えられました。

曲は、弟子への手紙に書かれた「1小節たりとも私が感じたことを表していないものはない」といった言葉や、フォン・メック夫人に宛てた詳細な説明から、「自身の人生の苦悩を反映し、“運命との闘いと勝利”を描いた音楽」とみるのが定説になっています。実際に、第1楽章冒頭で強奏されるファンファーレ風の旋律＝通称「運命主題」が全曲の核となり、第1、2楽章が短調、第3、4楽章が長調という“暗から明へ”の構成がなされてもいます。つまりベートーヴェンの『運命』交響曲と同質の作品です。ただ、正式な標題は記されていませんので、“管楽器が活躍する、情熱的で迫力に充ちたオーケストラ音楽”として純粋に楽しんでも、一向に差し支えありません。

フォン・メック夫人への説明の一部も、以下〈　〉内に記しておきますので、ご参考まで。

第1楽章：アンダンテ・ソステヌート — モデラート・コン・アニマ。冒頭に「運命主題」がファゴットとホルンで奏され、主部に入ると、弦楽器に出される第1主題〈絶望は激しくなる〉、クラリネットが奏する甘い第2主題〈幸福、しかしそれは夢でしかない…〉を中心に、激しい展開を遂げます〈人生の波は、我々を呑み込んでしまう〉。

第2楽章：アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ。オーボエに始まる哀しげなメイン主題が様々な楽器で奏され、中間部は舞曲調となります。〈夜中ひとりでいる時に包まれるような憂鬱な気分……。若い頃の思い出は楽しい。しかし新たな人生を始める気力はない〉。

第3楽章：スケルツォ、ピッツィカート・オスティナート、アレグロ。弦のピッツィカート、木管合奏、金管に始まる行進曲の各部が交替し、最後は合体する、ユニークな楽章。〈ほろ酔い気分の中で飛び交う気まぐれな唐草模様〉。

第4楽章：フィナーレ、アレグロ・コン・フオーコ。迫力満点のフィナーレ。冒頭の激烈な第1主題、ロシア民謡「野に立つ樺の木」に基づく第2主題、活発な第3主題が交互に登場しながら進みます。途中で「運命主題」が活気をさえぎりますが、圧倒的な興奮が戻って終結します。〈民衆の祭りの日。こんなに素朴な幸福がある。まだ生きていけるのだ〉。

（しばた・かつひこ／音楽ライター）